

不浄観を説く中阿含139經

——三啓集から回収された梵文テキストと和訳——

松 田 和 信

1 三啓經と三啓集

三啓經 (tridaṇḍa) は阿含經典の前後にアシュヴァゴーシャ (馬鳴、2世紀) の偈を配した読誦文献である。従来、義浄 (635-713) によって漢訳された『無常經』 (大正801) だけが三啓經として知られていたが、チベットのポカン寺に梵文貝葉写本で伝えられた『三啓集 (Tridaṇḍamālā)』には40種の三啓經が含まれている。『三啓集』の写本はアティシャ (Atiśa, Dīpaṃkaraśrījñāna, 982-1054) 自身によってインドからチベットにもたらされた写本であった可能性が高く、チベット各地に保存された梵文写本の来歴を知る上でも貴重な資料である。この写本は1939年にイタリアのツッチによってポカン寺で全体が撮影され、その写真はローマのツッチ・コレクションに、さらに同じネガから焼かれたと思われる写真がラーフラ・サーンクリトヤーヤナ・コレクションに存する。しかし、『三啓集』の正体が不明のまま学界では長く忘れられた状態にあった。筆者は、ラーフラ・サーンクリトヤーヤナの写本探査記の記述から見て、これが何らかの重要文献であるに違いないと推定し、友人の独ミュンヘン大学のイエンス＝ウヴェ・ハルトマン (Jens-Uwe Hartmann) を誘い、両コレクションの写真を用いて、2018年の夏より解読を開始した。筆者は、この2年半の間にすでに4編の論攷を発表し、現時点ではいまだ刊行されていないが、ハルトマンも1編を著している¹⁾。これまでに明らかになった点は、『三啓集』が阿含經典40種の

1) 松田 [2019] [2020a] [2020b] [2020c] Hartmann [2021]。本稿で略述した内容はこれら5稿に既に述べられているので、詳細についてはそちらを参照していただきたい。特に写本の来歴や状態、さらに漢訳『無常經』と義浄の記述については松田 [2019] および Hartmann [2021] 参照。

梵文テキストを提供するだけでなく、アシュヴァゴーシャ作品の多くの偈、特に第14章後半以降の『ブツダチャリタ (*Buddhacarita*)』の失われた偈、あるいは現存しないアシュヴァゴーシャの『莊嚴經論 (*Sūtrālamkāra*)』の偈を多く含む文献であるということであった。『三啓集』がこれまで未見であった貴重な原典資料を今後の阿含研究およびアシュヴァゴーシャ研究に提供することは間違いないが、どこを読んでも新たな発見に遭遇し、筆者から見ると『三啓集』は仏教文献研究の尽きない泉といっても過言ではない。

このように資料的価値は計り知れないが、ただ解読にあたっては大きな問題がある。写本写真の状態がそれである。写本は全体で116葉の貝葉からなるが²⁾、写真には所謂ピンボケ部分が多く、問題なく読めるフォリオは皆無である。さらに不思議なことに、ひとつのフォリオであっても均等に焦点が合っているわけではない。漢訳やパーリ語に対応のある阿含經典、あるいは『大智度論』や『坐禪三昧經』等の羅什文献に対応箇所認められる偈については、時間をかければ資料を比較して解読できるのではあるが、いまだ対応資料の見出せない部分では、お手上げに近い箇所が多く認められる。さらに残念なことに、写本の現物はポカン寺ではすでに失われたと聞く。二つのコレクションの不鮮明な写真を読むことしかできないのである³⁾。解読は現在も困難を極め、体力的にも視力的にも読めば読むほど寿命が縮む思いがしているが、この写本の重要性に鑑みると、そんなことを言っている場合ではないのかもしれない。本稿では、これまでに内容の判明している三啓經の中から、第21三啓經に用いられた『中阿含』139經（息止道經 **Śivapathikā-sūtra*, 大正1巻, 646c9-647a14）の梵文テキストと和訳を提示したい。この經典を選んだ理由は、不淨觀について他に類例のない教説が見られ、『大毘婆沙論』では不淨觀をめぐる議論に取り上げられ、さらに『俱舍論』のヤショーミトラ疏や安慧疏、衆賢の『順正理

2) 116葉のうち、第107葉が欠落しているので、残存するのは115葉である。

3) 両コレクションに収められた写真は同じネガから焼かれた同一写真ではあるが、引き伸ばし機のフォーカスの違いからか、プリントの状態は異なる。概してラーフラ・コレクションの写真の方がオリジナルの笥のツッチ・コレクションより鮮明である。ただし、ラーフラコレクションの写真は完全ではなく、一部が欠落している。なぜツッチの撮った写真のプリントがラーフラコレクションにも含まれるのか今となっては不明である。

論』でも言及される經典であるからである。なお、この經典はパーリ語聖典には対応經典は存在せず、さらにトルファン・コレクションや他所にも梵文断簡は発見されていない。梵文資料としては本稿が初めての発見である。

2 説一切有部への言及

『南海寄帰内法伝』の中で、義浄は「三啓」の著者（編者）をアシュヴァゴーシャであると言うが⁴⁾、三啓集写本の奥書も次のようにアシュヴァゴーシャの名を挙げる（Ms. 116r3-4）。

samāptā ceyam tridaṇḍamālā kṛtir ācāryasthavirāśvaghōṣa(116r4)sya śākyabhikṣoḥ sarvāstivādino mahāvādinah || この三啓集（*Tridaṇḍamālā*）は完了した。釈種比丘（Śākyabhikṣu）であり、説一切有部の人（Sarvāstivādin）であり、大論師（mahāvādin）であり、師（ācārya）にして上座（sthavira）たるアシュヴァゴーシャ（Aśvaghōṣa）の作（kṛti）である。

ただし、この奥書が言うように『三啓集』の著者（編者）を単純にアシュヴァゴーシャとみなすことはできない。確かに各經典の前後に配された偈のほとんどはアシュヴァゴーシャ作品から借用された偈である可能性が高いが、中には阿含經典の偈や他の人物の偈（例えば、アールヤシューラやゴーパダッタの『ジャータカマーラー』）が使われている場合も認められる。アシュヴァゴーシャの偈が多く使われていることから、義浄も、さらに写本の伝承でも、これをアシュヴァゴーシャ作とみなしたと考えるのが妥当であろう。40種の三啓經の中には、アシュヴァゴーシャが直接編纂に関わった三啓經があるかもしれないが、その多くはアシュヴァゴーシャ以降の編集であろうと筆者は推定する。

さらに、著者（編者）がアシュヴァゴーシャ、あるいはその後の複数の人物であったとして、では『三啓集』に含まれる40種の三啓經典がどの教団の三蔵から抜き出された經典であるのかということは確認しておくべきであろう。写本の奥書ではアシュヴァゴーシャは説一切有部の人物とされている。しかし話

4) 松田 [2019] 参照。

はそう単純ではないかもしれない。アシュヴァゴーシャ自身の帰属についてはこれまでも多くの議論がなされてきたが、正確なことは今なお不明であると言うしかない。ただ、現時点での有力な説は、思想的には経量部と親しい人物であったとみなす本庄良文説であると思う⁵⁾。あくまで思想的な話であるから、所属としては説一切有部ということであろう。従って、写本の奥書の記述と併せて、アシュヴァゴーシャや他の編者たちが用いた経典は説一切有部の阿含である可能性は高い。さらにそれを補強する資料も『三啓集』自体の中に見出される。それが第26三啓経の帰敬偈に見られる、説一切有部の教義にかかわる記述である。第26三啓経に使われた経典は『雑阿含』1172経（毒蛇経 **Āśīviṣa-sūtra*, 大正2巻, 313b-314a）である。その第一ダンダでは⁶⁾、仏法僧への三帰依偈に続いて、さらに自分の師たちに帰敬する3偈が置かれるが、最初の偈は以下の通りである（Ms. 66r1）。韻律は *Śārdūlavikrīḍita* (19×4) である⁷⁾。

ye paśyanty anupūrvaśo 'bhisamayaṃ bhāva<ṃ> cyutasyāntarā
svargastheṣv api satsu dharmacaraṇaṃ kālātraye 'vasthitam |
na dhyānaṃ prathamam phale vimalatā<ṃ> cittasya na prākṛtā<ṃ>
tān⁸⁾ vande paramārthayogaviduṣaḥ⁹⁾ sarvāstivādān gurūn ||

(1) 暫時の (anupūrvaśas) 現観 (abhisamaya) と、(2) 死んだ者 (cyuta) の

5) 本庄 [1987] [1993] 参照。

6) すでに松田 [2019] 等で述べたことであるが、ここで再確認しておく、三啓経は三つの部分（三啓 tri-daṇḍa）から構成され、第1ダンダでは三帰依偈に続いてアシュヴァゴーシャの偈が配され、第2ダンダでは阿含経典が、第3ダンダでは再びアシュヴァゴーシャの偈が配され、第3ダンダの末尾にブッダの教えを讃える定型偈を置いて一つの三啓経は終わる。この三啓経を40点集めた文献がポカン寺に梵文写本で伝えられた『三啓集』である。

7) 写本の語形を注記なく正規形に戻して校訂したが、3箇所のアヌスヴァーラのみ付加した箇所を示した。本稿における梵文テキストはすべて同様の校訂を施している。

8) 写本では当初 prākṛtānā と書かれていたものを欄外で prākṛtānā* と修正するが、本稿ではそれをさらに prākṛtā<ṃ> tān と修正した。次注も参照。

9) 写本では parārthayogaviduṣaḥ と書かれているが、次の偈もこの偈と同じ ye … tān … の構文で書かれ、pāda d では tān vande paramārthayogakuśalān buddhātmajāṃś chrāvakān（彼ら勝義のヨーガに巧みな、ブッダの本質から生まれた声聞たちに帰命する。）とあることから、この偈もそれに合わせて修正した。

中間の (antarā) 存在 (bhāva) と¹⁰⁾、(3) 天界に住む者 (svargastha) たちであつても法を行ずること (dharmacarāṇa) と、(4) 三時 (kāyatraya) に分位する (avasthita) 〔存在〕を認め、(5) 〔預流〕果 (phala) における初静慮 (prathamadhyāna) を〔認め〕ず、(6) 心の本性的な (prākṛta) 無垢性 (vimalatā) を〔認め〕ない、その彼ら勝義のヨーガを知る説一切有部 (Sarvāstivāda) の師 (guru) たちに帰命する。

この偈を正しく読解するには、各教団が独自に展開させたアビダルマ的背景を熟知しない限り困難ではあるが、筆者の見るところ、この偈には、(1) 四諦の漸現觀、(2) 中有の存在、(3) 天界における梵行、(4) 三世実有の分位説という4項目を説一切有部が認め、さらに、(5) 預流果において静慮を得ること、(6) 心性本浄という2項目を認めないということが紹介されていると思われる。興味深いことに、肯定される4点はいずれも『異部宗輪論』の説一切有部の教義の項で示され、否定される2点は大衆部系諸派の教義の項で紹介される。つまり、これら6項目はすべて『異部宗輪論』に説かれているのである。この偈は、当時のインドにおいて、説一切有部と大衆部の教義の相違点がこの6項目から特徴づけられていたことが窺われる貴重な梵文資料にもなろう¹¹⁾。

果たして、この偈の作者がアシュヴァゴーシャ自身であつたかどうかを判断するのは不可能であるが、少なくとも、この偈によって『三啓集』が説一切有部を外れた文献ではないことは確認できる。従つて『三啓集』に使われた阿含經典も説一切有部の經藏から抜き出された阿含經典である可能性は高いであろう。現時点で判明している限り、使われた40經典のうち、『雜阿含 (Saṃyukta-āgama)』から24經、『中阿含 (Madhyama-āgama)』から2經が認められ¹²⁾、

10) bhava の語形が望ましいであろうが、韻律上 bhāva を bhava と修正することはできない。

11) 例えば玄奘訳『異部宗輪論』(大正2031、49卷15a-17b)で言えば、15b25-16a24の大衆部の項および16a25-16c9の説一切有部の項に対応する記述が見られる。このような理解に筆者が至るには佛教大学大学院の田中裕成氏の教示があつたことは特記しておきたい。本稿ではこの偈を紹介することしかできないが、田中氏は、この偈に続く2つの偈も含めて、現存アビダルマ文献および『異部宗輪論』関連の文献を精査して、詳細を明らかにする新たな論文執筆を筆者に約束してくれたので、それを俟つことにしたい。その結果次第では、筆者の理解と和訳が修正を迫られることもありうるであろう。

パーリ語聖典には対応経がなくとも、いずれも説一切有部系とされる漢訳『雑阿含』および『中阿含』に対応経典が存在する¹³⁾。残り14経については法数でまとめた経典が多くあり、内容から判断して、そのほとんどは説一切有部の『増一阿含 (*Ekottarika-āgama*)』に含まれる経典であると推定されるが、有部の『増一阿含』は部分的にしか現存しないため、確認することはできない。なお14経の中には蔵外経典と思われる経典も認められる¹⁴⁾。

3 中阿含139経の梵文テキストと和訳

上述のように40種の三啓経の中には、説一切有部の『中阿含』から取り出されたと認められる経典がふたつ含まれる。それが第21三啓経に用いられた『中阿含』139経と、第29三啓経に用いられた『中阿含』124経である。後者については、本稿に先立って、大谷大学の上野牧生氏によって経典部分のみの梵文テキストと和訳が刊行されている¹⁵⁾。本稿では残された中阿含139経¹⁶⁾のテキストと和訳を公表したい¹⁷⁾。最初に述べたように中阿含139経は不浄観について説くが、パーリ語の対応経典も存在せず、説一切有部の独自経典と思われる。以下に『三啓集』写本から読み取った梵文テキストと和訳を提示する¹⁸⁾。

12) 三啓経としては40種であるが、個々の三啓経は、ひとつの経典ではなく、複数の阿含経典をつないでひとつの三啓経としている場合が複数認められる。

13) 漢訳『雑阿含』と『中阿含』については、榎本文雄 [1984a] [1984b] 参照。なお本稿では阿含の所属をめぐって、説一切有部と根本説一切有部をめぐらる問題については言及しない。ただ現在では研究が進み、例えば、漢訳『雑阿含』であれば、ただ単に説一切有部の『雑阿含』と言えば良いということであろう。それについては榎本文雄 [2020] 参照。

14) 正確に言うと、14経の中のひとつ（第39三啓経）は *Prasenajid-gāthā* と *Caityapradakṣina-gāthā*（大正700, 右邊仏塔功德経）を連続させた韻文経典で、四阿含に含まれる経典ではない。大乘経典とも認められないので、阿含の蔵外経典 (*muktakasūtra*) とでも言うべきか。前者については、ラサのポタラ宮所蔵の梵文写本に基づく校訂本が刊行されている。Bhikṣuṇī Vinītā [2010] pp. 210-258.

15) 上野牧生 [2020]。

16) 大正26 (139) 2巻 646c-647a, この経典は漢訳『中阿含』では「大品 (*Mahānipāta)」の第23経とされる。『中阿含』としては非常に短い経典である。

17) 第21三啓経の第一ダンダと第三ダンダには死体捨て場あるいは埋葬地（偈には *śivapathikā*, *śmaśāna*, *pitṛvana* の三語が現れる）とその無常を描写する複雑で長い偈が数十偈配されている。写真の状態も悪く、それらの偈を正しく解読することは簡単ではない。現時点では第二ダンダの経典を紹介するのみに止めざるをえない。

evaṃ mayā śrutam ekasmin samaye bhagavāñ chrāvastyāṃ viharati sma jetavane
 'nāthapiṇḍadasyārāme || tatra bhagavān bhikṣūn āmantrayate sma | navakena bhikṣavo
 bhikṣuṇā śīlavatādisaṃpannena kṣipraṃ rāgadveṣamohān samavahantukāmenābhikṣṇaṃ
 śivapathikā gantavyā | śiva(51r3)pathikāṃ gatvā śārīrāṇy upasaṃkramitavyāni | śārīrāṇy
 upasaṃkramya nimittam udgrhītavyam | tadyathā (1) vinīlakam iti vā (2) vipūyakam iti
 vā (3) vipaḍumakam iti vā (4) vyādhmātakam iti vā (5) vikhāditakam iti vā (6) vilohitakam
 iti vā (7) vikṣiptakam iti vā (8) asthīti vā (9) saṃkaliketi vā¹⁹⁾ (10) asthisamkaliketi vā
 ni(51r4)mittam udgrhītavyam | nimittam udgrhya tvaritatvaritaṃ śayanāsanam
 āgantavyam | śayanāsanam āgatvā²⁰⁾ bahir vihārasya pādaḥ prakṣālya vihāre praviśya
 mañcake niṣattavyaṃ bṛsyāṃ vā pīṭhake 'tha vā | mañcake sanniṣadya bṛsyāṃ vā
 pīṭhake 'tha vā tām eva sa bhikṣuḥ saṃjñāṃ bhāvayet | tadyathā (1) vinīlakam iti vā (2)
 vipūyakam iti (51r5) vā (3) vipaḍumakam iti vā (4) vyādhmātakam iti vā (5)
 vikhāditakam iti vā (6) vilohitakam iti vā (7) vikṣiptakam iti vā (8) asthīti vā (9)
 saṃkaliketi vā (10) asthisamkaliketi vā nimittam udgrhya tām eva sa bhikṣuḥ saṃjñāṃ
 bhāvayet | kṣipraṃ rāgaṃ ca dveṣaṃ cāvidyāṃ ca virāgayan vidyāṃ utpādayan bhikṣur
 duḥkhakṣayam avāpnuyāt || (51v1) idam avoca bhagavān idam ukṭvā sugato hy
 athāparam etad uvāca śāstā ||

yo bhaven navako bhikṣuḥ śaikṣo 'saṃprāptamānasah |
 gacched asau śivapathikāṃ hantaṃ rāgaṃ yadīcchati || 1 ||

avyāpannena cittaṇa sarvabhūtānukampinā |
 diśaḥ sarvāḥ spharitvāsau śārīrāṇy upasaṃkramet || 2 ||²¹⁾

saced vinīlakam paśyet sacet paśyed vipūyakam |

18) Ms. 51r2–51v5. 注7に述べたように、以下は校訂されたテキストである。校訂の元にな
 った写本の単純なローマ字転写は本稿の末尾に掲載しておくので参照していただきたい。

19) Ms. asthisamkaleti vā.

20) Ms. śayanāsanam gatvā.

21) *Udānavarga*, 31.42に類似した表現が見られる。avyāpannena cittaṇa yo bhūtāny anukampate |
 maitraḥ sa sarvasattveṣu vairam tasya na kena cit || Bernhard [1965] p. 422.

saced vyā(51v2)dhmātakam paśyed asthisamkalikām api || 3 ||

tām eva bhāvayan samjñām gacchet sa śayanāsanam |
śayanāsanam āgamyā pādaḥ prakṣālya ca smṛtaḥ |
mañcake sanniṣīded vā bṛsyām vā pīṭhake 'tha vā || 4 ||

mañcake sanniṣadyātha bṛsyām vā pīṭhake 'tha vā |
svakam kāyam avekṣeta ūrdhvam antar bahis tathā || 5 ||

pūrṇam gūthasya mūtrasya vṛkkāyā hṛdayasya ca |
(51v3) yakṛnmedomalādīnām antrāntraguṇayor api || 6 ||

saced bhaktāya gaccheta grāmam piṇḍāya vā vrajet |
yathā yodhaḥ susaṃnaddho nityam smṛtipuraḥsaraḥ || 7 ||²²⁾

dr̥ṣṭvā rūpam rañjanīyam śubham rāgopasaṃhitam |
aśubhām bhāvayet tatra ekāgraḥ susamāhitaḥ || 8 ||²³⁾

naivāto 'sthi samādeyam na māṃsan nāpi śoṇitam |
na yakṛ(51v4)t phupphusaṃ vāpi majjā klomakamastakam || 9 ||

nirarthakaḥ pṛthivīdhātur abdhātuś ca nirarthakaḥ |
nirarthakas tejodhātur vāyudhātur nirarthakaḥ || 10 ||

yāś cātra vedanāḥ santi śubhā rāgopasaṃhitāḥ |
tāsām upaśamo bhavati paśyati prajñayā yadā || 11 ||

evaṃvihārī ātāpī ahorātram atandritaḥ |
kṣipram rāgam atho dveṣam avidyāṃ ca (51v5) virāgayan |

22) 後代の文献であるが、pāda c の yathā yodhaḥ susaṃnaddho と全く同じ表現が *Mañjuśrīmūlakalpa* に見られる。yathā yodhaḥ susannaddho praviśed raṇasaṅkaṭam | arīn mardayate nityam ripubhir na ca hanyate || *Buddhist Sanskrit Texts*, No. 18, p. 71, v. 66. 同儀軌のこの前後には不浄観が説かれてるが、他にも類似した表現が複数見られる。恐らく『中阿含』139経が種本であろう。

23) この偈も *Mañjuśrīmūlakalpa* の前注の偈に続く偈に内容的に近い。evaṃ mantrī sadā grāmam praviśed bhikṣānujīvinah | rañjanīyam tathā dr̥ṣṭvā rūpam śabdāṃs tu vai śubhām || *ibid.* p. 71, v. 67.

vidyām utpādayan bhikṣur duḥkhakṣayam avāpnuyāt || 12 ||

idam avocad bhagavān ||

〔和訳〕 このように私は聞いた。ある時、世尊はシュラーヴァスティ（舍衛城）のジェータ（祇陀太子）の林にあるアナータピンダダ（給孤独長者）の園（祇園精舎）に留まっていた。そこで世尊は比丘たちに言った。「比丘たちよ、戒を備え（śīlavat）、初めて具足戒を受け（ādisaṃpanna）、速やかに貪（rāga）瞋（dveṣa）痴（moha）を断じようと欲する初心の（navaka）比丘は、直ちに（abhīkṣṇam）死体捨て場（śivapathikā）へ行くべきである。死体捨て場へ行って、死体（śarīra）に近づくべきである。死体に近づいてから〔死体の〕相（nimitta）を把握すべきである。すなわち、(1) 青ぶくれし（vinīlaka）、(2) 腐敗し（vipūyaka）、(3) うじ虫がたかり（vipaḍumaka）、(4) 膨張し（vyādhmātaka）、(5) 〔獣に〕食い荒らされ（vikhāditaka）、(6) 赤紫になり（vilohitaka）、(7) 散乱し（vikṣiptaka）た〔死体〕、(8) 骨（asthi）、(9) 散乱した骨（saṃkalikā）、(10) 〔無数の〕骨の連鎖（asthisamkalikā）〔といった死体の〕相を把握すべきである。相を把握し終わったら、急いで居住地（śayanāsana）に帰るべきである。居住地に帰ったら、精舎（vihāra）の外で両足を洗って精舎に入り、寝台（mañcaka）か敷物（br̥sī）か椅子（pīṭhaka）に座るべきである。寝台か敷物か椅子に座ってから、その比丘はこのような想（saṃjñā）を修習すべきである。すなわち、(1) 青ぶくれし、(2) 腐敗し、(3) うじ虫がたかり、(4) 膨張し、(5) 〔獣に〕食い荒らされ、(6) 赤紫になり、(7) 散乱した〔死体〕、(8) 骨、(9) 散乱した骨、(10) 〔無数の〕骨の連鎖〔といった死体の想を〕である。その比丘が〔死体捨て場で〕相（nimitta）を把握して、〔精舎で〕その〔相と〕同じ想（saṃjñā）を修習するなら、速やかに貪・瞋・痴を離れ、明知（vidyā）を生じる〔その〕比丘は、苦の滅尽を得るであろう。」このことを世尊は説いた。説き終わって、善逝にして師である〔世尊〕はそこでさらに次のことを語った²⁴⁾。

24) 以下の偈について Chung & Fukita [2011] 125頁は、『中阿含』139經の大正藏經の脚注あるいは赤沼智善『漢巴四部四阿含互照録』18頁の記述に従ってのことであろうが、Suttanipāta vv. 193ff. を指摘するが、それが直接的なパラレルであるということではない。

有学 (śaikṣa) にして、いまだ意の確立しない (asamprāptamānasa) 初心の比丘が貪欲 (rāga) を断じようと欲するなら、死体捨て場 (śivapathikā) に行くべきである。(1)

すべての生き物 (bhūta) を憐れむ (anukampin) 瞋恚のない (avyāpanna) 心 (citta) をもってあらゆる方向に広がって (spharitvā)²⁵⁾、その〔比丘〕は死体 (śarīra) に近づくべきである。(2)

もし〔比丘が〕青ぶくれした (vinīlaka) 〔死体〕を見るなら、もし腐敗した (vipūyaka) 〔死体〕を見るなら、もし膨張した (vyādhmātaka) 〔死体〕を見るなら、〔ないし〕骨の連鎖 (asthisamkalikā) 〔まで〕も〔見るなら、〕(3)

それと同じ想 (saṃjñā) を修習すべく、その〔比丘〕は居住地 (śayanāsana) に帰るべきである。居住地に帰ってから両足を洗って念を保ち (smṛta)、寝台 (mañcaka) か敷物 (bṛsī) か椅子 (pīṭhaka) に座るべきである。(4)

寝台か敷物か椅子に座ったら、次に (ūrdhvam)²⁶⁾、内側 (antar) と外側 (bahis) から自分の身体 (kāya) を観察すべきである。(5)

大便 (gūtha) と小便 (mūtra) に満ち、腎臓 (vṛkkā) と心臓 (hṛdaya) 〔があり〕、肝臓 (yakṛt) や脂肪 (medas) や分泌物 (mala) など 〔があり〕、腸 (antra) と直腸 (antraguṇa) も 〔ある身体を〕。(6)

もし〔その比丘が〕食事 (bhakta) のために出かけるなら、あるいは施食 (piṇḍa) のために村に遊行するなら、頑丈な鎧を纏った (susamṇaddha) 戦士 (yodha) のように、常に念 (smṛti) を先行させる (puraḥsara) 〔べきである〕。(7)

〔村の中で〕魅惑的で (rañjanīya) 美しく (śubha) 貪欲 (rāga) と結びつい

25) この表現は大乗經典 (例えば『入法界品』) でも見られるが (*Buddhist Sanskrit Texts*, No. 5, p. 33, v. 20, 283, v. 42)、ここでは「すべての方向に注意を凝らして」という意味であろう。

26) 写本には確かに ūrdhvam と書かれているように見えるが、この副詞をどう理解するかは筆者にははっきりしない。暫定的にこのように訳しておく。

た (upasaṃhita) [女性の] 外觀 (rūpa) を見ても、そこでは [念を] 一点に (ekāgra) 集中して (susamāhita) 不浄想 (aśubhā) を修習すべきである。(8)

それゆえに [不浄想においては] 決して把握されるべき骨 (asthi) はなく、肉 (māmsa) も血 (śoṇita) も肝臓 (yakṛt) も肺 (phupphusa) も髓 (majjā) も肋膜 (klomaka) も頭蓋 (mastaka) もないのである。(9)

[身体を構成する] 地界 (pṛthivī-dhātu) は実質なく (nirarthaka)、水界 (ap-) も実質なく、火界 (tejas-) も実質なく、風界 (vāyu-) も実質がないのである。(10)

そこでは、美しく、貪欲と結びついた諸々の感受 (vedanā) があるが、慧 (prajñā) によって [女性の外觀を] 観察する時には、それら (感受) は静まるのである。(11)

昼も夜も (ahorātram) 倦むことなく (atandrita)、このように過ごし (vihārin)、集中する (ātāpin) 比丘は、速やかに貪と瞋と無明 (avidyā) を離れて、明知 (vidyā) を生じ、苦の滅尽 (duḥkhakṣaya) を得るであろう²⁷⁾。(12)

以上のことを世尊は説いた。

4 中阿含139經を引用するアビダルマ文献

第21三啓經として使われた『中阿含』139經は、現存資料で見える限り、先に述べたようにパーリ語の対応經典は存在しない。三啓集は梵語文献であるから、無論この經典も梵語で記されている。榎本文雄氏が指摘するように²⁸⁾、漢訳『中阿含』の原典がガンダーラ語であったとすれば、その後、この經典は梵語

27) 第12偈は6句よりなるが、一部残存する説一切有部の『増一阿含』に部分的なパラレルが見られる。Tripathi [1995] p. 148, tasmāl lobham atho dveṣam avidyāṃ ca virāgayan | vidyām utpādayan bhikṣur duḥkhakṣayam avāpnuyāt || さらに Pāli, *Itivuttaka*, PTS ed., p. 34, 漢訳『本事經』大正17卷 688a にも同様の偈が含まれる。

28) 榎本文雄 [1984b] pp. 94-95 参照。

化された『中阿含』から取り出されたことになる。共同研究者のイエンス＝ウヴェ・ハルトマンの指摘によると、この經典の韻文部分には中期インド語から梵語化された痕跡が見て取れるという²⁹⁾。従って、パーリ語ヴァージョンが存在しないとしても、少なくとも韻文部分は古い伝承に遡ることは確かであろう。さらに韻文部分では、不浄觀を通して、身体を構成する要素に実質がない（*nirarthaka*, 中阿含では「空」と訳す）と理解することを説くのであるから、散文部分より韻文部分の方がより踏み込んだ内容を説いているともいえる³⁰⁾。また、この經典の散文部分と韻文部分に共通して説かれていることで、他の經典に見られない特徴は、139經では「息止道」と訳される死体捨て場（*śivapathikā*）で不浄觀を行うのではなく、そこで見た光景を記憶して自分の住居に持ち帰り、そのイメージを思い描いて不浄觀を行うという点にある。このような、他に見られない独特の教説が古い伝承に遡るのであれば、不浄觀を議論するアビダルマ論師たち、あるいは禅觀文献類の著者たちに注目されてしかるべきであろう。そのような視点から検索すると、經典自身が「初心の比丘」と説くように、様々な文献で、いずれも初心者（*navaka*, *ādikarmika*）の不浄觀を議論する際に139經を引用したり、それに言及していることが分かる。まず、玄奘訳『大毘婆沙論（*Vibhāṣā*）』の卷187における四念住の議論の中に見られる引用を示そう（大正27卷, 940a7-10）。

經説云何通。如説新學苾芻具淨尸羅意樂圓滿。欲疾除斷欲貪瞋者。應往澹泊路詣死屍所善取其相。或青淤或膿爛。乃至廣説。

玄奘三蔵は *śivapathikā* を「澹泊路」と訳しているが、この引用は『中阿含』

29) 2020年12月21日付私信による。例えば、*śivapathikā* (1b), *prthivī* (10a), *bhavati* (11c) は中期インド語では *śivathikā*, *prthvī*, *bhoti* であり、梵語化されたことにより音節が増え、これらの語を含むパダのみ *vipulā* となっているという。さらに *evamvihārī ātāpī* (12a) など中期インド語を背景に持つ典型的な *vipulā* であるから校訂に当たってサンディを修正してはならぬと。なお『三啓集』の解説にあたって、筆者とハルトマンの役割分担であるが、基本的にはそれぞれが関心のある箇所を独自に読み進めているが、互いに解説結果とそれにかかわる発見を日常的に交換して再確認を行っている。

30) 同様の表現は『舍利弗阿毘曇論』にも見られる。大正1548, 28卷, 628b2ff.

139經の散文部分前半の引用に他ならない³¹⁾。さらに直接的な引用ではないが、同論卷40に次のような言及も見られる（同, 205b14ff）。

謂彼行者先往塚間觀察死屍青瘀等相。善取相已退坐一處重觀彼相。若心散亂不明了者。復往塚間如前觀察善取其相。如是乃至若得明了心不散亂速還住處。洗足就座結加趺坐。調適身心令離諸蓋。憶念觀察先所取相。以勝解力移屬自身。始從青瘀乃至骨瑣...

ここで śivapathikā は「塚間」と意識されているが、塚間で不浄觀を行うのではなく、相を記憶して帰って行く、さらに相が不明瞭になれば再び塚間へ行って同じことを繰り返すことを求めるというのであるから、この經典を前提にした議論である。下線部のように、死体が捨てられた場所においてではなく、そこで見た相を持ち帰って不浄觀を行う記述は、他にも『瑜伽師地論』「声聞地」³²⁾あるいは鳩摩羅什の編集とみなされる『禅法要解』などにも現れる³³⁾。いずれもこの經典を前提にしたものであろう。さらに衆賢 (Saṅghabhadra) の『阿毘達磨順正理論 (*Nyāyānusāriṇī Abhidharmakośa-ṭīkā)』では³⁴⁾、次のように經名を挙げての言及も見られる（大正29卷, 671b23ff.）。

如世尊説。初修行者欲求方便速滅欲貪當起慈心之澹泊路。精勤修觀乃至廣説。至彼處已爲欲伏治四種貪故。應如四種。澹泊路經。修不浄觀觀外屍相。以況

31) 『国訳一切經』印度撰述部・毘曇部16, 266頁はこの引用を『中阿含』卷24の念處經（同第98經）等と注記するが、誤りである。

32) Shukla [1973] p. 416.4ff. 声聞地研究会 [2018] pp. 126-127参照。阿部貴子 [2020] は声聞地の不浄觀について阿含や他の論典との関係に詳しいが、声聞地のこの箇所にも、『中阿含』139經にも言及しない。

33) 『禅法要解』に言う「一者觀死屍臭爛不浄。我身不浄死屍一等無有異也。如是觀已心生惡厭。取是相已。至閑靜處若樹下若空舍。以所取相自觀不浄…」(大正616, 15卷, 286b25ff.) も同じことを述べていると思われる。

34) ここで筆者の想像を書くことが許されるなら、論理的に正しいかどうかを自ら判断するという立場に立って説一切有部の教義を批判した世親の『俱舍論』に対して、純粹に有部の教義伝承という立場から、『俱舍論』に対して歴史上最初に書かれた批判的注釈書が『順正理論』であるとみなして良いのではないか。無論「順正理 (*Nyāyānusāra)」という注釈書のタイトルも、衆賢からすれば、こちらの方こそ論理的に正しいという思いが込められたものであろう。

内身。彼相既然。此亦應爾...

これは四種の貪欲の対治としての不浄観を定義する『俱舍論』「賢聖品」9d-11ab に対する注釈文中の引用であるが³⁵⁾、『大毘婆沙論』における引用と同様、下線部は139経の散文前半部に一致する。この後には経名の『澹泊路經 (*Śivapathikā-sūra)』も明記される。さらに、この箇所においては世親自身の散文注釈 (*Bhāṣya*) が139経を引用することはないが³⁶⁾、ヤショーミトラ疏では次のように139経の韻文部分から第1偈と第3偈が連続して引用される³⁷⁾。

yo bhaven navako bhikṣuḥ śaikṣo 'saṃprāptamānasah |

gacched asau śivapathikāṃ hantum rāgaṃ yaścchati ||

tato vinīlakam paśyeta tataḥ paśyeta vipūyakam |

tato vyādhmātakam paśyeta asthisamkalikāṃ apīti ||

これらふたつの偈は安慧疏 (*Tattvārthā*) にもヤショーミトラ疏と同様に引用されるが³⁸⁾、本稿で公表した139経の偈とは看過できない相違がある。まず、俱舍論疏引用のふたつの偈は139経の第2偈を飛ばして第1偈と第3偈をつないだものであるが、漢訳『中阿含』139経には第2偈も含まれていることから、当初から第2偈が存在しなかったわけではない。さらに、139経の第3偈では *sacet* を4回使った並列的な文章であるに対して、俱舍論疏の引用ではそれを *tatas* に置き換え、時間的順序を表す文章となっている。恐らくこれは『俱舍論』の世親釈が不浄観の個々の順序を説いていることに合わせて *sacet* から

35) これと同様の文章は衆賢の独立した主著とみなされる『阿毘達磨藏頭宗論』にも現れる (大正29巻, 917b5ff.)。

36) 従って、シャマタデーヴァの注釈書 (*Upāyikā*) の中で『中阿含』139経が引用されたり言及されることはない。

37) Wogihara [1932-36] p. 526, 19-22. 和訳は櫻部建・小谷信千代 [1999] 83頁参照。訳者は引用の典拠には気づいていない。なお、最初の偈の *pāda c* は和訳が指摘するように (85頁注7) *śivapathikāṃ* に修正した。

38) Ms. C39r1: ... uktaṃ hi bhagavatā <> yo bhaven navako bhikṣuḥ śaikṣo 'saṃprāptamānasah <> gacched asau śivapathikāṃ bhetum rāgaṃ yaścchati | tato vinīlakam paśyeta (C39r2) tataḥ paśyeta vipūyakam <> tato vyādhmātakam paśyeta asthisamkalikāṃ apīti | チベット語訳は北京版 Tho 352a2-4.

tatas に改変されたように推測できる。さらに139經の第2偈はこの論述の中では必ずしも必要ないから引用しなかったのであろう。ただし、注釈者によって引用元の聖典の語が都合良く改変されるという事象が一般的であるのか、特殊なケースであるのかは今後考える必要があるだろう。

これまでも『中阿含』139經に説かれるような、死体捨て場で見た光景を記憶し、住居に持ち帰るという独特の不浄觀に留意する研究者は複数いたが、アビダルマ文献あるいは禪觀文献類に見られる記述に注目するだけであって、その典拠を『中阿含』139經に探し当てた研究者は見あたらないように思う³⁹⁾。いずれにしても、これまで知られていなかった『中阿含』139經の梵文原典が発見されたことによって、不浄觀にかかわる研究に新たな資料を提供することになるのは確かであろう。

5 資料編—漢訳とローマ字転写

最後に、『中阿含』139經（大正1巻, 646c9-647a14）と梵文写本のローマ字転写を資料編として提示しておきたい。筆者が本稿で提示した梵文テキストをどのように校訂したかを確認するためにこのローマ字転写を参照していただきたい。また、漢訳の韻文部分については通常の漢訳のレイアウトを変え、梵文テキストの12偈に対応するように偈番号を入れた。

我聞如是。一時佛遊舍衛國。在勝林給孤獨園。爾時世尊告諸比丘。年少比丘始成就戒。當以數數詣息止道觀相。骨相。青相。腐相。食相。骨鎖相。彼善受善持此相已還至住處。澡洗手足。敷尼師檀。在於床上結加趺坐。即念此相。骨相。青相。腐相。食相。骨鎖相。所以者何。若彼比丘修習此相。速除心中欲恚之病。於是世尊説此頌曰。

- (1) 若年少比丘 覺未得上意 當詣息止道 欲除其姪欲
- (2) 心中無恚諍 慈愍於衆生 遍滿一切方 往至觀諸身

39) 例えば、林隆嗣 [2020] (51)頁、注18、山部能宜 [2011] 参照。両氏の論攷は内容的には非常にすぐれた論文であると思う。

- (3) 當觀於青相 及以爛腐壞 觀鳥蟲所食 骨骨節相連
(4) 修習如是相 還歸至本處 澡洗於手足 敷床正基坐
(5) 當以觀真實 內身及外身
(6) 盛滿大小便 心腎肝肺等
(7) 若欲分衛食 到人村邑間 如將鎧纏絡 常正念在前
(8) 若見色可愛 清淨欲相應 見已觀如真 正念佛法律
(9) 此中無骨筋 無肉亦無血 無腎心肝肺 無有涕唾腦
(10) 一切地皆空 水種亦復然 空一切火種 風種亦復空
(11) 若所有諸覺 清淨欲相應 彼一切息止 如慧之所觀
(12) 如是行精勤 常念不淨想 永斷婬怒癡 除一切無明
興起清淨明 比丘得苦邊

佛說如是彼諸比丘聞佛所說歡喜奉行。

Manuscript Transliterated⁴⁰⁾

51r2 ... evam=mayā śrutam ekasmin samaye bhagavāñ chrāvastyāṃ viharati sma |
jetavane 'nāthapiṇḍadasyārāme tatra bhagavān* bhikṣūn āmantrayate sma || navakena
bhikṣavo bhikṣuṇā śīlavatā ādisampannena kṣipraṃ rāgadveṣamohān* samavahantukā-
menābhikṣṇaṃ śivapathikā gantavyā śiva

51r3 pathikām* gatvā śārīrāṇy upasaṃkramitavyāni śārīrāṇy upasaṃkramya nimittam
udgrhītavyam* || tadyathā vinīlakam iti vā vipūyakam iti vā vipaḍumakam iti vā
vyādhmātakam iti vā vikhāditakam iti vā | vilohitakam iti vā | vikṣiptakam iti vā |
asthīti vā | asthisamkaleti vā | asthisamkaliketi vā | ni

51r4 mittam udgrhītavyam* | nimittam udgrhya tvaṇitātvaṇitaṃ śayanāsanam
āgantavyam* | śayanāsanam gatvā bahir vvihārasya pādau prakṣālya vihāre praviśya

40) 写本には後の時代に欄外に文字を追記したり、本文中に修正を施した箇所が複数見られるが、以下の転写はそれらの修正を取り込んで行った。従って以下の転写は書写生によって写本が書かれた時点のものではない。

mañcake niṣattavyam* bṛsyām=vā pīṭhake tha vā mañcake sanniṣadya bṛsyām=vā
pīṭhake tha vā tām eva sa bhikṣuḥ saṃjñām=bhāvayet* | tadyathā vinīlakam iti vā
vipūyakam iti

51r5 vā | vipaḍumakam iti vā | vyādhmātakam iti vā | vikhāditakam iti vā | vilohitakam
iti vā | vikṣiptakam iti vā | asthīti vā | saṃkaliketi vā | asthisamkaliketi vā | nimittam
udgrhya tām eva sa bhikṣuḥ saṃjñām bhāvayet* || kṣipraṃ rāgaṃ ca dveṣaṇ cāvidyāṃ
ca virāgayan* vidyāṃ utpādayan bhikṣur duḥkhakṣayam avāpnuyāt* ||

51v1 idam avocad bhagavān idam uktvā sugato hy athāparam etad uvāca śāstā || yo
bhaven navako bhikṣuḥ śaikṣo 'saṃprāptamānasah gacched asau śivapathikāṃ hantum
rāgaṃ yadīcchati || avyāpannena cittaṇa sarvvabhūtānukampinā | diṣaḥ sarvvāḥ
spharitvāsau śārīrāṇy upasaṃkramet* || saced vinīlakam paśyet* sacet paśyed
vipūyakam* | saced vyā

51v2 dhmātakam paśyed asthisamkalikāṃ api || tām eva bhāvayan saṃjñām gacchet sa
śayanāsanam* | śayanāsanam āgamyā pādau prakṣālya ca smṛtaḥ || mañcake sanniṣīded
vā bṛsyām=vā pīṭhake tha vā | mañcake sanniṣadyātha bṛsyām=vā pīṭhake tha vā ||
svakam kāyam avekṣeta ūrdhvam antar bbahis tathā | pūrṇaṃ gūthasya mūtrasya
vṛkkāyā hṛdayasya ca ||

51v3 yakṛṇmedomalādīnām* antrāntraguṇayor api | saced bhaktāya gaccheta grāmaṃ
piṇḍāya vā vrajet* || yathā yodhaḥ susaṃnaddho nityaṃ smṛtipurassaraḥ | dṛṣtvā rūpaṃ
raṃjanīyaṃ śubhaṃ rāgopasaṃhitam* | aśubhāṃ bhāvayet tatra ekāgraḥ susamāhitaḥ ||
naivāto sthi samādeyaṃ na māṃsan nāpi śoṇitam* | na yakṛ

51v4 t* phuphusaṃ vāpi majjā klomakamastakam* || nirathakaḥ pṛthivīdhātur abdhātuś
ca nirarthakaḥ | nirarthakas tejodhātur vāyudhātur nirarthakaḥ || yās cātra vedanāḥ santi
śubhā rāgopasaṃhitāḥ | tāsāṃ upaśamo bhavati paśyati prajñayā yadā || evaṃvihārī
ātāpī ahorātram atandritaḥ | kṣipraṃ rāgaṃ atho dveṣaṃ avidyāṇ ca

51v5 virāgayan* | vidyāṃ utpādayan bhikṣur duḥkhakṣayam avāpnuyāt* || idam

avocad bhagavān* |

〔参考文献〕

阿部貴子

〔2020〕「『声聞地』の不浄観—諸経論との関係性をめぐって—」『智山学報』69号, pp. (119)–(139).

上野牧生

〔2020〕「第29三啓経（八難経）の梵文テキストと和訳」『仏教学セミナー』111号, pp. 21–46.

榎本文雄

〔1984a〕「説一切有部系アーガマの展開」『印度学仏教学研究』32巻2号, pp. (51)–(54).

〔1984b〕「阿含經典の成立」『東洋学術研究』第23巻1号, pp. 93–108.

〔2020〕「『根本説一切有部』再考」*Bauddhakośa Newsletter*, 第9号, pp. 2–10.

櫻部建・小谷信千代

〔1999〕『俱舍論の原典解明・賢聖品』法蔵館

声聞地研究会

〔2018〕『瑜伽論声聞地』「第三瑜伽処」山喜房佛書林。

林隆嗣

〔2020〕「骨想（骨相）を増大してはならない—上座部仏教における不浄観の理論と実践—」『印度学仏教学研究』69巻1号, pp. (44)–(52).

本庄良文

〔1987〕「馬鳴詩の中の経量部説」『印度学仏教学研究』36巻1号, pp. (87)–(92).

〔1993〕「馬鳴の学派に関する先行学説の吟味」『渡邊文麿博士追悼記念論集・原始仏教と大乘仏教』下巻, pp. 27–43.

松田和信

〔2019〕「三啓集（*Tridaṇḍamālā*）における勝義空経とブッダチャリタ」『印度学仏教学研究』68巻1号, pp. 1–11.

〔2020a〕「ブッダチャリタ第16章に見られるアートマン批判—三啓集写本による梵文テキストと和訳—」『インド論理学研究』12号（2021年1月時点で未刊）

〔2020b〕「ブッダチャリタ第15章「初転法輪」—梵文テキストと和訳—」『佛教大学仏教学会紀要』25号, pp. 27–44.⁴¹⁾

〔2020c〕「大智度論におけるアシュヴァゴーシャ—如来十号論に埋め込まれた莊嚴経論—」『印度学仏教学研究』69巻1号, pp. (53)–(61).

山部能宜

41) 佛教大学のリポジトリより入手可能。https://archives.bukkyo-u.ac.jp/rp-contents/BK/0025/BK00250L027.pdf

[2011] 「大乘仏教の禪定実践」『大乘仏教の実践』シリーズ大乘仏教 3, 春秋社。

Bernhard, Franz

[1965] *Udānavarga, Sanskrittexte aus den Turfanfunden* 10, Band I, Göttingen.

Bhikṣuṇī Vinīta

[2010] *A Unique Collection of Twenty Sūtras in a Sanskrit Manuscript from the Potala*, 2 vols., Vienna - Beijing.

Chung, Jin-il & Fukita, Takamichi

[2011] *A Survey of the Sanskrit Fragments Corresponding to the Chinese Madhyamāgama*, Sankibo Press.

Hartmann, Jens-Uwe

[2021] “Forms of Intertextuality and Lost Sanskrit Verses of the *Buddhacarita*: the *Tridaṇḍaka* and the *Tridaṇḍamālā*”, in Gregory Schopen’s Festschrift, ed. by Shayne Clarke and Daniel Boucher (unpublished).

Shukla, Karunesha

[1973] *Śrāvakabhūmi of Ācārya Asaṅga, Tibetan Sanskrit Works Series*, vol. 14, Patna.

Tripathi, Chandrabhal

[1995] *Ekotrāgama-Fragmente der Gilgit-Handschrift*, Dr. Inge Wezler Verlag, Reinbek.

Wogihara, U.

[1932–36] *Sphuṭārthā Abhidharmakośavyākhyā; the Work of Yaśomitra*, Tokyo.